

# ミニマルな美学とプリコラージュ

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授

いとう たけし  
伊藤 毅

## 町屋の街 - ミニマルな建築

世界のどの都市を訪ねても、歴史的に都市化、高密度を経験した都市は必ずといっていいほど町屋あるいは町屋的な建築タイプを生んでいる。町屋という

建築タイプの基本的な特徴をあげると、接道型建築、接隣型建築の二つがある。前者は建物の正面の外壁(つまりファサード)が道路に直接面するというので、門や塀をもたないタイプを指す。日本の例でいうと寝殿造や武家屋敷などは町屋タイプではない。後者は間口が狭くて、奥行の深い敷地が道路に沿ってずらっと隣接しながら並ぶ。間口の広さよりもともかく道路に面したい、道路に開きたいという志向性の強い建築が町屋で、商工業者の併用住宅が町屋になるケースが多い。

写真1はハノイの旧市街の町屋地区を斜め上部から俯瞰した写真である。ハノイの旧市街は通称、「36通り」と呼ばれる。これはかつてこの地区に仏具屋、漢方薬屋、銀細工屋など、36の同業者町があったことに由来する。現在もハノイでもっとも活気溢れる賑やかな地区である。写真をみると、庇の出がほとんどないシンプルな切妻屋根がひしめき合うように密集しているが、あちこちに採光・通風のための中庭が確保されていることがわかるだろう。

その具体的姿をみることができるいい例がある。写真2は旧市街ママイー通り87番地に保存されている町屋である。当初1家族用の住宅として19世紀末に建てられた

が、1954年から99年にかけて5家族がここに住みつくようになり、大幅な改造が加えられた。ハノイ市とフランス・トゥールーズ市との協力によるハノイ旧市街保存再生プログラムによってこの住宅は試験的な保存再生事業の対象となり、1999年10月に竣工して現在一般公開されている。

写真-1(上) ハノイ旧市街町屋地区

写真-2(下) ママイー通り87番地の町屋



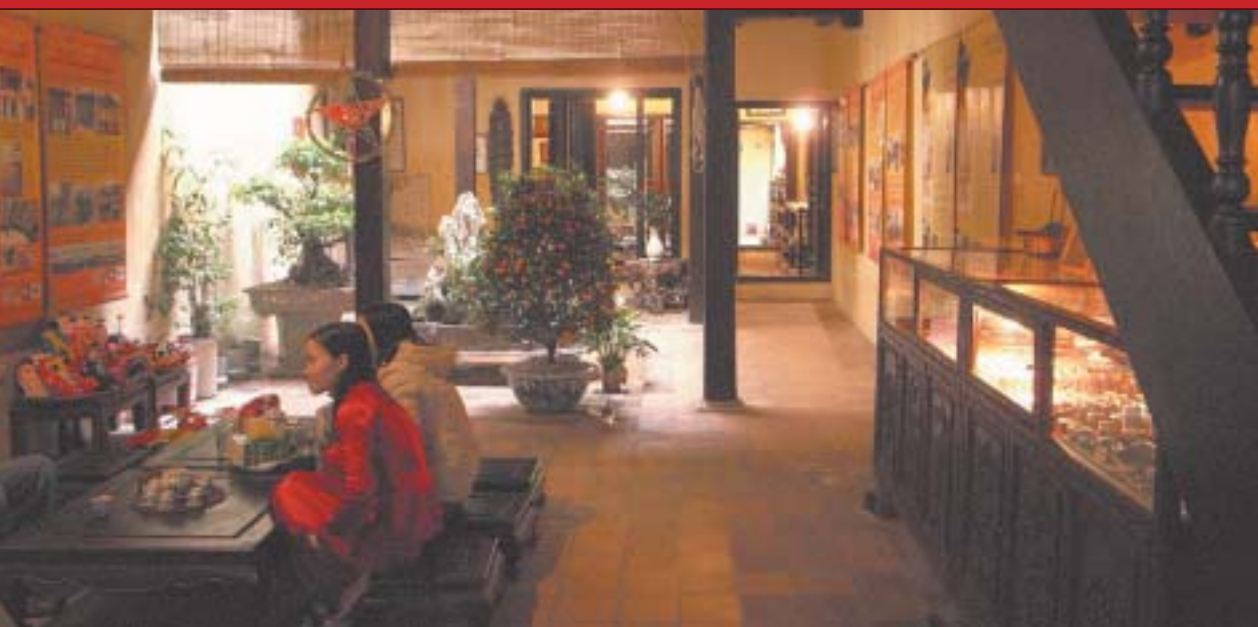


写真3(上) 町屋内部  
写真4(下) 町屋の中庭

この町屋は低い2階建ての建物で、間口はおよそ5メートル程度しかない。全体は3つの切妻屋根をかけたユニットからなり、道路側から奥行き方向に向かってこのユニットが列状に配置されている。したがって内部に入ると居室が1列に奥に向かって並ぶことになる(写真3)。それぞれの部屋は両側面が戸境壁で閉じられるが、前後には開放されており、採光や通風を十分に考慮していることがわかる。ユニットとユニット

の間には中庭が設けられ、そこから光や風を取り込むしかけとなっている(写真4)。

この形式は狭い間口で奥行き深い敷地を最大限利用しつつ、快適な都市居住を可能にする、高度に洗練された都市型住宅、すなわち町屋の完成形といってよい。日本では京都の町屋が近世後期にこうした完成形に達するが、ハノイのこの町屋に比べると室内はもう少し閉鎖的で暗い。町屋という建築は都



写真5 実験住宅(ハノイ建設大学キャンパス内)

市のなかで高密度に住むために生み出された建築タイプだが、限られた空間を有効利用しつくすという点においてミニマルズの建築といえることができる。ハノイの都市的な感覚はこうしたミニマルな建築を高度に発達させたのである。

ハノイの伝統的な町屋のよさを現代に生かすことができなから。そういう興味深いプロジェクトが行われた。建築家の小嶋一浩氏と曲淵英邦氏による実験住宅である(写真5)。このプロジェクトは高密度な集住をさらに立体的に実現すべく、立体ユニットを組み合わせるとともに建物の各所に3次元的な中庭を挿入している(写真6)。もともと36通り地区に建設すべく提案されたものであったが、種々の事情で実現せず、現在ハノイ建設大学のキャンパス内に置かれているのは残念なことだ。

### バイクの謎 - ミニマルな機械

ベトナムを訪れて最初に驚くのはバイクの異常な数である。ハノイなどの大都市ではその傾向がさらに激しくなり、クラクションの喧騒が街中を支配し、たちこめる排気ガスで目眩がしそうである。交差点の信号や車線もあってなきがごとし、路上にはわずかな



写真6 立体的な中庭

隙間をぬって走るバイクの大群が押し寄せ、道路を横断することも容易でない(写真7)。日常の交通手段とはいえ、この数は尋常ではない。彼らはなぜこんなにバイクに乗るのか。

国民の豊かさの指標としてしばしば用いられる国民1人あたりの総生産(GDP)の2005年のデータをみてみよう。ベトナムは世界142位(618ドル)、日本は世界14位(35,757ドル)だから、およそ日本人の60分の1の所得しかない。決して裕福とはいえない。

バイクは店頭価格2500ドル前後で売られているようである。とすると彼らの年収のおよそ4倍だから、日本人にとってみればマンション購入に近い高価な買い物である。こんなに高い買い物なのに、どうして町のなかにはこんな数のバイクが溢れているのだろう。ど



写真7 路上に溢れるバイク



写真8 路上の食堂

のようにして彼らはバイクを手に入れるのだろう。この謎について中臣久氏があれこれ考察を巡らしている（『なぜバイクが買えるのか』『アジア読本ヴェトナム』河出書房新社所収）。

中臣氏によると、謎に対する決定的な答えはないが、おそらくヴェトナム人は公表されている総生産よりも実際にはもっとお金を持っているのではないかという結論に達している。表面化する経済と裏の経済、つまり文明評論家イヴァン・イリイチのいう「シャドールワーク」というわけである（イリイチは家事労働や再生産労働などの財に換算されない隠れた経済に着目し、それをシャドールワークと名付けた - 『シャドールワーク』岩波現代文庫）。

中臣氏の推論は大いにありうる。しかしそれより先、

生活にかかる費用が圧倒的に少ないのではないか。社会主義の国だから重税に苦しめられることはない。交通費、食費、衣料費など、先進国と比較して驚くほど安価である。路上には食事時になるとどこからともなく食材と簡単な調理道具やガラスケースを抱えた女性があらわれ決まった場所で店開きする（写真8）。庶民の多くはこうした外食に依存している。実際に確かめたことはないが、おそらく1食あたり数十円程度ではないか。住宅も近年売りに出されている高級マンションや戸建て住宅を購入するのでもなければ、安い家賃で済むはずである。かくして彼らの収入の大半はバイクや決して安くはないガソリン代に費やされるのである。バイクは小さな乗り物であるが、きわめて効率性の高いメカニズムをもっていて、そこにはミニマルな機械の美学が潜んでいる。こうした美学を背景に日本の技術者はバイクを洗練させていった。ヴェトナム人にも似たような性向があるのかもしれない。

とはいえ、ここ数年のヴェトナムのGDPの伸び率に注目すると、経済は順調な成長を遂げている。2005年の経済成長は8.4%、世界第23位をランクした。急成長が喧伝されている中国がこの年10.2%世界8位だから、中国の陰に隠れてあまり目立たないが、ヴェトナムの近年の経済成長はこれに迫る勢いがある。



写真-10 ファットジェム教会側面

自家用車を所有する富裕層も次第に増えているものとみられ、市内にはバイクの大群に混じって時々高級車が通る。やがてハノイも北京のように自家用車が主流になっていくに違いない。そういうエネルギーが街のそこかしこに充満している。バイクは豊かさへの一時のイニシエーション(通過儀礼)かもしれない。

### ファットジェム教会 - 究極のプリコラーージュ

ヴェトナム北部、ハノイの南のニンビン省キムソン地区にあるファットジェム教会は驚異の建築である。西洋建築史や日本建築史に慣れ親しんだ目でこの建築をみると、言葉を失ってしまう。様式的な説明は、一応は可能だろう。ゴシック様式とヴェトナムの伝統的な宗教建築様式の折衷だと。否、この建築はそんな通俗的なプログラムで成立した建築とは別物であった。

西洋建築でも日本の建築でもさまざまな様式を組み合わせて折衷する様式を好む時代があった。ヨーロッパでは新古典主義様式、わが国では観心寺(大阪府)や鶴林寺(兵庫県)など、中世に登場した和様に禅宗様的なディテールを加味した折衷様という様式がある。これらはいずれも折衷様式ではあるが、必ず建築の全体性を示す構造があり、折衷される要素は主として装飾に限られていた。

ところがこのファットジェム教会はそんな中途半端な混ぜ合わせではない。まったく異なる要素の唐突な接合と共存。しかも異なる要素はそれぞれ自己主張をしていて、お互い譲るところがない。そうした折衷の仕方はおそらく歴史上珍しい例に違いない。折衷というより、「プリコラーージュ(器用仕事)」という手法に近いものを感じる。プリコラーージュとは、人類学者レヴィ・ストロースが『野生の思考』のなかで提示した概念で、限られたわずかな道具や素材を器用に組み合



わせてひとつのものを  
つくりあげる技術を指  
す。最初から全体像が  
あるわけではなく、断  
片を組み合わせてつり  
あげていくプロセスの  
なかで構造が次第に  
姿をあらわす。

ファットジェム教会は  
ヴェトナム最大のカトリ  
ック教会で、1875年か  
ら1899年の間に建設

された。約2ヘクタールの広大な敷地には教会本体は  
もとより、湖や鐘楼、チャペル、劇場などがたち並ぶ。  
教会の正面は石造で、ゴシック様式とヴェトナムのパ  
ゴダ建築の様式が混交された不思議な雰囲気醸  
し出している(写真9)。

写真-9(上)ファットジェム教会正面  
写真-11(下)ファットジェム教会内部

側面にまわるとそこにはまったく別物の長大な2層  
からなる木造建築が横たわっている(写真10)。石造  
と木造の唐突な接合がそこにはある。木造部分は巨  
大な円柱が林立し、一見すると仏教寺院のようでも  
あるが、見方を変えると身廊と両側廊からなる初期キ



写真12 ハノイオペラハウス

リスト教のバシリカ建築にもみえる。

内部にはいと大架構の吹抜空間が広がっている(写真11)。仏教建築の細部と架構を用いているが、内部のつくりは明らかに教会の空間である。つまりここには構造、細部、空間の機能がまったく従来の文法を逸脱し、奇妙なかたちで共存しているのである。ポストモダンを経験したわれわれにとっては建築のパロディのようにもみえるが、建築そのものはヴェトナムに根付くようなカソリック教会を志向したに違いなく、至極真面目につくられている。これは折衷というより、ブリコラージュである。限られた様式の知識、限られた構造技術を駆使してヴェトナムにふさわしいカトリック教会が創出されたのである。

## 支配を超えて

ヴェトナム(Viet Nam)という国名はヴェトナム自身がつけたものではなく、中国の清朝が名付けたものである(小倉貞男『物語ヴェトナムの歴史』中公新書)。中国は1000年にわたってヴェトナムを支配し、ヴェトナム

は中国の属国という立場に甘んじつつも、東南アジアにおける中心という複雑なナショナル・アイデンティティを形成した。

その後19世紀後半からはフランスによって植民地化され、およそ80年に及ぶフランス支配を受けてきた。ハノイにはフランス植民地時代の建築が数多く残され、現在でこそ歴史的な文化遺産として手厚く保護されているが、かつては支配の象徴そのものであった(写真12)。そしてアメリカの政治的介入によって引きおこされたヴェトナム戦争。

ヴェトナムはつねに大国の支配・介入にさらされながらもけって国家のアイデンティティとプライドを失わず今日まで生き延びてきた。ヴェトナムは東南アジアのなかでも、とくに知的レベルの高い国であるといわれる。それはヴェトナムが輩出した数々の偉人がそのことをよく証明しているし、街の姿や建築からも読み取れる。いまのところそのキーワードはミニマルな美学とブリコラージュにあると私はみている。過酷な支配・戦争のなかで紡ぎ出された生き延びる智慧は、こうした細部に象徴的にあらわれているのではないか。